

# 〔78〕ロバートキヤの『白鳥の湖』

2006マリインヌキー・バレエ公演

2006年12月16日 東京新聞 夕刊

いま『白鳥の湖』を踊ることは、とても難しい。バレエに興味のない人でも題名くらいは知っている名作だが、説得力のあるヒロインにはなかなか出会えないのである。

そもそも悪魔の呪いで白鳥に変えられるという設定が現代的でない。それを何かの比喻と解釈するにしても、忍従があながち美德とは見なされない現代、薄幸の女性の美を歌い上げるのは容易ではない。

さいわいなことに『白鳥の湖』の主役は善と悪の表裏一体をなしていて、白鳥姫オデットと悪魔の娘オディールを同じバレリーナが踊り分けるのがふつうである。バレリーナというのは気の強い人が多いから、まるで第二幕のオデットでうじうじ不幸を嘆いた腹いせのように、第三幕で澁刺と王子をたぶらかし、華麗な妙技で観客の喝采をさらったあげく意気揚々と退場、という次第になったりする。舞踊としての見応えはあるようなものの、物語的には悪の印象が鮮やかなのはやはり問題ではないか。いや、もしかすると現代という時代はえてして善人より悪人のほうが受けたりする

## 〔78〕 ロパートキナの『白鳥の湖』

### 2006マリインヌキー・バレエ公演

2006年12月16日 東京新聞 夕刊

から、これまた時代を反映しているのかもしれない。

そんななかで、ウリヤーナ・ロパートキナはまことに美しいオデット・バレリーナである。この十二月に来日したマリインヌキー（旧キーロフ）・バレエのトップの座をディアナ・ヴィシニョワと分け合うスターだが、「ロパートキナのすべて」というバレエ・コンサートの他、全幕の『白鳥の湖』『海賊』にも主演し、殊に『白鳥の湖』は圧巻だった。

ロパートキナの踊る白鳥姫は、徒らにドラマティックな表現をせず、完成された動きそのものの美質で魅了する。バレリーナ自身の恣意的な表現や自己主張を極限まで削り取った、ほとんど無機質な動きの中で、音楽が歌うのだ。一見して無表情なロパートキナが感じさせる深い叙情性は、じつは音楽を雄弁に語らせる力量でもある。

バレリーナの動きは流れるように止まることがないが、無数の完璧な映像を観客の網膜に印画していく。その彫像のように完璧な造形美は、見る者の眼に、永遠をかいま見たような思いにさせず

## 〔78〕ロパートキナの『白鳥の湖』

2006マリインヌキーン・バレエ公演

2006年12月16日 東京新聞 多刊

にはおかない。バレエという躍動的な舞踊にもかかわらずロパートキナが極めて静的な印象を与えているのは、その踊りが太古とか、永遠とかいったものの特性に通じるものを持っているからではないだろうか。そう、ロパートキナが踊るのを見てみると、人はしばしば時が止まったような感覚に襲われるのだ。

それはたとえばアングルなどの新古典派と呼ばれる画家たちの画布に似ていないこともない。リ Aristeyck な装飾を削ぎ落とした陶器のような滑らかさ。その造形性と質感がもたらすほとんど幻想的な静けさがロパートキナの踊りには漂っている。

ジャンルを問わず芸術というものは、一日たりとも変化の歩みを止めることはない。どんなに崇高と見える表現も、超絶的な技も、繰り返しになれば輝きを失う。それは古典バレエでも同じことだ。一つの作品の古典的美質を損なうことなく、いかにして現代的な感覚を付け加えるか、そこが勝負なのである。そしてロパートキナは、彼女だけに可能な方法で（というのも、その造形感覚や

# 〔78〕ロパートキナの『白鳥の湖』

2006マリインヌキーン・バレエ公演

2006年12月16日 東京新聞 夕刊

持ち前の神秘性はたやすくまねのできるものではないからだか、その難問をみごとに解いてみせたバレリーナだと言えるだろう。

ロパートキナが主演する『白鳥の湖』は、白鳥姫オデットがいいようもなく美しい。これでこそ『白鳥の湖』だと納得できるものだが、しかし実は彼女は白鳥姫を《演じて》いるのではなく、ブテイパ古典の振付をあくまで丹念に磨き上げただけだとも言えるのだ。そのように磨き上げるに値する振付であることこそ、古典ということの定義であり、価値なのではないだろうか。ロパートキナの踊りは、古典を換骨奪胎することなく現代に生かす道を示している。